

多文化社会における“伝統と文化を伝える学校活動”の構造

——オーストラリア・シドニー市にある2つの公立小学校の事例から——

山 田 真 紀*

Teaching Tradition and Culture in a Multicultural Society
—An Investigation based on two Public Primary Schools in Sydney, Australia—

Maki YAMADA

1. はじめに

当該社会の文化と伝統を伝達することは学校教育の大切な役割のひとつである。日本においては日本の共通言語を教える国語科、日本の歴史や地理、政治や経済のしくみを教える社会科が中心となり、音楽科や図工・美術科のなかで伝統的な芸能や文化を教材とし、あるいは教科外活動のなかで季節の伝統行事や風俗を取り入れることで、その役割を果たしてきた。しかし、世界に視点を転じてみると、人々の移動が活発になり、民族的・宗教的・言語的に異なったバックグラウンドをもつ人々がともに暮らすようになることで、多くの国において“国家の伝統と文化”を定義することは困難となりつつある。そのため、学校教育がいかに国家の伝統と文化を次世代に伝えようとしているのかを明らかにすることは、興味深いテーマである。

本稿では、オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州シドニー市にある公立小学校2校の事例をもとに、このテーマに接近してみたい¹⁾。国家の伝統と文化と、学校教育との関係を考察するうえで、オーストラリアほど興味深い国はない。なぜならば、オーストラリアは1788年1月26日から白人の入植がはじまり、1901年に連邦化してはじめて独立国家となったことから、“近代国家の成立”という観点からは歴史が浅い。さらにオーストラリアの国民のほぼ4人に1人が外国生まれであり、最も一般に話されているのは英語、イタリア語、ギリシャ語、広東語、アラビア語、ベトナム語、北京語、そして、国民のおよそ15%が家庭では英語以外の言語を話すという多民族国家である。そのため、オーストラリア独自の文化や伝統を定義するのは容易なことではないのである。

* 人間関係学部 人間関係学科

2. オーストラリアの伝統と文化を伝える学校教育のしくみ

オーストラリアは「オーストラリア人であるという共通性を模索し創造する」「民族的・宗教的・言語的多様性を尊重すること自体がオーストラリアの共通価値である」という一見すると矛盾するかのように見える理想を追求している。そのため、教育の場面では、(1)子どもを「オーストラリア人」として育てるとともに、(2)オーストラリアの共通の理念である民族的・宗教的・言語的な多様性を尊重する態度を身につけること、そして(3)生徒が自らのバックグラウンドに対する理解を深めることができる教育を展開することを重視している。

筆者はこの3年の間、継続的にシドニー市内にある2つの公立小学校で調査を実施している。以下では、オーストラリアの伝統と文化を伝える学校教育の構造を示しつつ、両校で展開されている実践例を紹介していきたい。実践例は、校長先生のインタビューから得られたデータと、両校で発行されている学校便り News Letter に掲載された内容を利用している。また、論文中に使用した写真は、A小学校の学校便りに掲載された写真を、校長の許可を得て転載している。なお、ふたつの公立小学校の概要は以下の通りである²⁾。

A小学校は都心部にある学級数9クラスの小規模な小学校、B小学校は郊外のニュータウンにある学級数27クラスの大規模な小学校であり、両校ともに、マルチカルチャーなバックグラウンドをもつ生徒が多く通う学校である。A小学校には22種類の言語的バックグラウンドをもつ生徒がおり、生徒の74%が非英語圏の出身、特に学区の一部にチャイナタウンを含むため、全生徒の45%が中国系である。B小学校には45種類の言語的バックグラウンドをもつ生徒がおり、生徒の90%が非英語圏の出身、特にベトナム、中国、韓国などのアジア系が多く、またニュージーランドの先住民であるマウリ族の子どもたちも多く通っている。

(1) “オーストラリア人”を育てる教育活動

“オーストラリア人”を育てる教育活動は以下の3つの領域において実践されている。

第一に、共通言語である英語の学習である。学習指導要領において示される教科のうち、最初に登場するのが「英語」であり、学習指導要領上は配当時間を定めていないものの、各学校ではもっとも時間数を割いて教えられている³⁾。オーストラリアに移住して間もない子どもたちは、「第二言語としての英語」ESL: English as a second language の授業を受ける⁴⁾。

第二に、オーストラリアの歴史・地理・政治と経済のしくみを学ぶ学習である。学習指導要領において示される教科のうち、「人文社会と環境」HSIE: Human Society and Its Environment がこの学習を担っている。

第三に、オーストラリアの国家的行事を取り入れる活動である。オーストラリアの国家的行事のうち、学校活動と密接な関連をもち、重要性の高いものは図表1に示した7つの行事である。

以下では、第三の領域に属する活動を「アンザックセレモニーの実践」「先住民族に対する理解を深める活動」「クリーンアップオーストラリアの行事にちなんだ学校清掃」の3つに分類し、A小学校およびB小学校の実践例について紹介していきたい。

多文化社会における“伝統と文化を伝える学校活動”の構造

行事名称	実施日	目的と内容
オーストラリアデー Australia Day	1月26日	1月26日は1788年にフィリップ総督率いる第一船団 first Fleet がオーストラリア大陸に上陸した日である。1818年から「建国記念日」として祝われるようになり、1946年に現在の名称に変更された。200周年の1988年には、第一船団の歴史に関わりなくすべてのオーストラリア人が参加できる祝祭行事となった。
クリーンアップ オーストラリアデー Clean up Australia Day	3月の 第一日曜日	1989年から実施されているオーストラリア美化運動の日。公共の場所・職場・学校において美化運動を推進するほか、環境問題に積極的に取り組む日である。
ハーモニーデー（調和の日） Harmony Day	3月21日	他民族を尊重し、調和に満ちたコミュニティを実現するための日であり、国連の「民族的差別撤廃の日」と同じ日に設定されている。この日は調和のシンボルカラーであるオレンジ色の服を着ることが奨励されている。
アンザックデー Anzac Day	4月25日	第一次世界大戦中の1915年にトルコのガリポリで生まれた「アンザック軍団兵士」の伝説を思い起こし、オーストラリアの自由と栄光のために戦争で命を落とした人々を偲ぶ日。
ナショナルソーリーデー （謝罪の日） National Sorry Day	5月26日	1995年に過去に入植者が先住民のアボリジニとトレス島嶼民に対して行ったジェノサイド（特定民族の大量虐殺）の事実を認め、国家的な謝罪と補償を行うことを決めた記念日。
和解週間 National Reconciliation Week	5月27日から 6月3日	1996年から、先住民と非先住民の和解に向けての努力を結集するために設立された。初日の5月27日は、1967年にオーストラリアの法令から先住民に対する差別的な条項を取り除くために、90%のオーストラリア人が国民投票に参加した記念日であり、最終日の6月3日は、北オーストラリアにある Murry 島の先住民が、先祖代々使用してきた土地に対する権利を認めてほしいと訴えた裁判において、オーストラリア高等裁判所が原告の訴えを認め、「イギリス人入植者が来る前はオーストラリアには誰もいなかった」という考えを捨て、先住民の権利を認めていこうとする流れが生じることとなった記念日である ⁵⁾ 。
アボリジニとトレス島嶼民週間 National Aboriginal and Torres Strait Islander week	7月最初の日曜日 から次の日曜日 まで	先住民であるアボリジニとトレス島嶼民と、彼らの文化について理解を深めるための週間。1957年にアボリジニへの理解を促進するために始まり、1991年にトレス島嶼民を加えて、今の形となった。NAIDOC (National Aboriginal and Islander Day Observance Committee) Week と呼ばれることもある。

図表1 オーストラリアの主要な国家的行事



写真1 アンザックセレモニーにおける生徒リーダーと講演者の記念撮影
(注) A Public School Newsletter, Term 2 Week 2, Friday 6 May 2005 より転載

①アンザックデーセレモニーの実践

A 小学校の事例：アンザックデーセレモニー

2004年4月30日(金)、2005年4月29日(金)に実施

この日は金曜日の全校朝会を「アンザックデーセレモニー」として実施する。このセレモニーは戦争で戦い、そして亡くなった人々を忘れないために行うものである。学生リーダー（6年生のうち選挙で選ばれた生徒代表の8名）が司会を務め、戦争体験者を招いて講演会を催す⁶⁾。講演会の後は、学生リーダーと講演者がともにモーニングティを取り、講演者の人生経験と戦争での出来事について語り合う。2005年度は、講演者から「人生で成し遂げたいことがあるのなら、常に目標を高く掲げよ」との教訓を賜った。（写真1を参照のこと）

B 小学校の事例：アンザックデーセレモニー

2004年4月8日(火)、2005年4月8日(金)に実施

アンザックデーの2週間前に学校のホールでアンザックデーセレモニーを催す。生徒は12時30分に花束やリースをもって学校ホールに集まり、ホールに続く COLA: covered outside learning area（屋根つきの学習の場）には保護者用の椅子が配置される。セレモニーでは戦争経験者のスピーチを聞き、ふたりの生徒が詩を朗読し、花束やリースを持参した生徒が舞台上に花やリースを手向ける。参列した保護者は、セレモニーのあとのランチを子どもと一緒に過ごすことができる。

②先住民に対する理解を深める活動

A 小学校の事例：「謝罪の日」および「和解週間」にちなんだ活動

2004年5月27日(木)から6月3日(木)に実施。

2004年度のテーマは「3つのRを忘れないようにしよう！権利 Right 尊敬 Respect 和解 Reconciliation」。先行する2004年5月25日(火)には「謝罪の日」にちなんだ活動として、ア



写真2 国家的謝罪の日になんで「手の海」を作る活動

(注) A Public School Newsletter, Term 2 Week 5, Friday 28 May 2004 より転載

ボリジニとトレス島嶼民の子どもを親から引き離し、白人の家庭で養育した過去について学び、オーストラリアの先住民と非先住民とのあいだに新しい理解にもとづく関係を築く決意を打ち立てる活動を行った。9時に始まる集会では、生徒はなぜ「謝罪の日」があるのか、「手の海 Sea of Hands」にはどのような重要性があるのかについての話を聞く。その後、生徒は旗の掲揚セレモニーに参加するためにフラッグポールの周りに集まる。そして、アボリジニとトレス島嶼民の旗を掲揚し、1分間の黙祷をささげる。その後、運動場にて、手の形をかたどった厚紙に棒がついた多数のモニュメントを地面にさし、「手の海」を作る。手をかたどった厚紙には、アボリジニが住居としていた洞窟や岩穴の壁面に手をおき、その上から染料を吹きかけることで、手の形の印を残す習慣があったことから、アボリジニの伝統的な生き方の象徴としての意味が込められている。その後、生徒・教職員・保護者とともに、「集まろう get together」をスローガンとするBBQをして昼食を食べる。(写真2を参照のこと)

A 小学校の事例：「和解週間」になんだ活動

2005年5月23日(月)から5月30日(月)に実施。

2005年度のテーマは「和解：次の一歩を踏み出そう」。先住民と非先住民が、先住民が抱える問題に取り組むための新しくよりよい方法を見出し、お互いに建設的な関係を築いていこうとする姿勢を身につけることを目的とする。そのために、先住民が被った悲しい過去についての正しい理解を促し、過去が現在における先住民の人々の暮らしにどのような影響を与えたかについて考察させる。最終日の5月30日(月)には、和解週間を記念するため、昨年と同様に、アボリジニとトレス島嶼民の旗を掲揚し、運動場に「手の海」を作る活動を行った。その後、12時30分から1時30分に、アボリジニダンスのダンサーが学校を訪れ、子どもたちはダンスを楽しんだ。



写真3 アボリジニとトレス島嶼民週間に行われたアボリジニのアーティストとのワークショップ

(注) A Public School Newsletter, Term 3 Week 2, Friday 30 July 2004 より転載

A 小学校の事例：「アボリジニとトレス島嶼民週間」の活動

2004年7月5日(月)から10日(土)まで。

2004年度のテーマは「理解+尊敬－無視＝知識」。月曜日は9時から9時15分にオープニングセレモニーを行う。その後、アボリジニ系のスペシャルゲストが各クラスを訪れ、アボリジニの子孫として生まれた半生について語る。火曜日は学校時間全部を使ってさまざまな活動が提供される。例えば、お絵かき、ビーズ作り、料理、バッジ作りなど。お絵かきワークショップではスペシャルゲストとともにアボリジニアート作成に取り組む。ランチタイムには無料のBBQを行う。水曜日は植樹のセレモニーを行う。金曜日は9時から「アボリジニとトレス島嶼民週間」を祝う特別集会を催す。集会の司会進行はアボリジニとトレス島嶼民の生徒が務める。集会では、アボリジニダンスシアターのパフォーマンスがある。その後、各クラスでダンサーによるダンスのワークショップが開かれる。この一週間は保護者も積極的に学校の活動に参加する。(写真3を参照のこと)

A 小学校の事例：「アボリジニとトレス島嶼民週間」の活動

2005年7月4日(月)から8日(金)まで

2005年度は、アボリジニの文化を保護し、アボリジニ系オーストラリア人の現代オーストラリアへの貢献に感謝することを目的に実施する。この活動を通して、非アボリジニの生徒のアボリジニについての理解、特にアボリジニの文化の素晴らしさとその多様性への理解を深めるとともに、アボリジニ系の生徒には、彼らの文化を他の生徒と分かち合うことにより、自分のバックグラウンドに対するプライドを高める機会を与える。7月20日(水)に1日を使った活動の日を設ける。ブーメランの投げ方、アボリジニの伝統的なゲームの遊び方、アボリジニスタイルのジョニーケーキをBBQで焼く活動、お絵かき、ダンス、歌、ドリーミングストーリーについてのビデオ鑑賞⁷⁾、お話を聞く、お話をする、バッジを作る、自然界の材料を使ってアボリジニの伝統的な生活の模型を作る、インター

ネットを使って有名な先住民オーストラリア人について調べるなどの活動を行う。7月22日(金)の全校集会では、活動日においてそれぞれの生徒が体験したことを、他の生徒と分かち合う機会をもつ。

B 小学校の事例：「アボリジニとトレス島嶼民週間」の活動

2004年6月28日(月)

アボリジニとトレス島嶼民週間である1週間は、オーストラリアの国旗とともにアボリジニの旗を上げる。生徒は、物語の読み聞かせ、音楽、アートなど、さまざまな活動を開講しているクラスにいき、アボリジニやトレス島嶼民の文化に親しむ。

③「クリーンアップオーストラリア」の行事にちなんだ学校清掃

A 小学校の事例：2005年3月4日(金)

教師の監督のもと、生徒が学校内と学校周辺のゴミ拾いをする。この活動はクリーンアップオーストラリアデーにちなみ、身近な環境をきれいに保つ責任があることを体験的に学ばせるためのものである。生徒はゴム手袋とゴミを入れるプラスチック袋を持参する。

B 小学校の事例：2004年3月5日(金)

生徒が庭の芝を刈り、学校中のごみを取り除く。生徒は、各家庭からトング（ごみをつまむ道具）とゴム手袋を持参する。

(2) 民族的・宗教的・言語的な多様性を尊重する活動

民族的・宗教的・言語的な多様性を尊重する活動は、生徒の立場からすると、①自分の民族的・宗教的・言語的バックグラウンドを自覚するとともにそれらに誇りをもつこと、②他者のバックグラウンドも同様に尊重する態度を身につけることという2つの側面を持っている。多様性を尊重する活動は以下の3つの領域で実施されている。

第一に、人文社会と環境 HSIE の教科のなかで多文化共生に必要な知識と態度、すなわち民族・言語・宗教の多様性について学ぶ。学習指導要領において、「人文社会と環境」はその教育目標のひとつに「社会的市民的な参加を可能にする。そのために、社会的正義、文化間の理解、環境保護、民主的な手続き、信念や道徳心、生涯学習の意義について理解させる」を掲げている。

第二に、「英語以外の語学教育」 LOTE: languages other than English において、子どもたちは自分のバックグラウンドの言語を学ぶ機会をもつ。学習指導要領には、中国語・ギリシア語・インドネシア語・イタリア語・日本語・韓国語の6ヶ国語のシラバスが準備されている。各学校は、学校の民族の構成を考慮して、どの言語を学ばせるかを決定する。いくつかの言語を指定して選択制にすることもある。小学校段階では外国語は必修ではないため、小規模な学校や、生徒のバックグラウンドがあまりに多様で、ニーズの高い言語が特定しにくい地域では授業を設定しない場合もある。LOTE は言語習得だけでなく、当該言語の背後にある文化や風習について学ぶことを重視している。

第三に、教科外活動のなかで、学校の民族的・宗教的構成に配慮しながら、それぞれの国の伝統文化や習俗、それぞれの宗教的祝祭を取り上げることである。このような行事の

なかで生徒は他民族や他宗教についての理解を深めるとともに、自分のバックグラウンドに関する行事を取り上げてもらった生徒は、自分のバックグラウンドに誇りをもち、セルフエスティームを高めることができる。

以下では、第二と第三の領域について、①LOTEの開講状況、②多文化に親しむ活動、③学区の民族的特性を生かした活動、④キリスト教の祝祭行事を題材とした活動の順でA小学校およびB小学校の実践例を紹介していきたい。

①LOTEの開講状況

A小学校の事例：中国語と中国語の特別クラスの開講

A小学校では生徒のバックグラウンドに関わらず、すべての生徒が中国語の授業を受ける。配当時間はK（小学校の最初の学年である準備学級）で週に30分、1年生から6年生では1時間である。中国系の生徒にはさらに持ち出し授業形式の中国語が1時間あり、特別教室において高度な中国語の読み書きを学ぶ。中国語の授業では、中国の伝統的な祝祭行事、新正月・月の祭りなどを取り入れて、文化や習俗への理解を深める活動を行う。

B小学校の事例：5言語クラスの開講

B小学校では、中国語、アラビア語、インドネシア語、マウリ語、マサドニア語の5言語の授業が開講されており、生徒は自分のバックグラウンドにあわせて、また5言語以外のバックグラウンドをもつ生徒はインドネシア語を週に2時間学ぶ。年に1度、1週間にわたり学校で教えられている第二言語を祝う「第二言語祭」LOTE/CLOTE WEEKが開かれる。CLOTEはCommunity Language other than Englishの略である。B小学校で教えられている5つの言語に関連して、それぞれの国の伝統的な歌や踊りが披露され、これらのバックグラウンドをもつ保護者が来校し、母国の言語で本を読み聞かせ、母国での生活について語る活動をする。

②多文化に親しむ活動

A小学校の事例：多文化弁論大会 Multicultural Public Speaking Competition

2005年5月18日(水)

ホールで9時10分から9時45分まで開催する。2年生から6年生までの生徒の前で、3年生から6年生までの各クラスから2名ずつ、つまり12の代表者がクラスで決めたテーマに基づいて弁論を披露する。3・4年生からふたり、5・6年生からのふたりの計4名の生徒が学校代表に選出され、区の大会に進むことができる。学校代表は、先生と練習をしてよりよい弁論を作り上げるとともに、5分前にテーマを与えられて即興で弁論するセッションの練習もする。

A小学校の事例：ダンスフェスティバル DANCE NOVA FESTIVAL

2004年11月12日(金)

10時30分から11時20分まで、生徒はさまざまな国の民族衣装を着て、それぞれの国の伝統的なダンスを踊る。11時20分から12時20分まで、自分のバックグラウンドの伝統的な料理を少し多めに持ち寄り、友達とシェアする特別なランチを運動場で催す。(写真4を参照)



写真4 ダンスフェスティバル

(注) A Public School Newsletter, Term 4 Week 4, Friday 5 November 2004 より転載

B小学校の事例：「調和の日」にちなんだ活動

2004年3月23日(火)

B小学校では、調和の日にちなんで以下の3つの活動を実施している。2004年度のスローガンは「私＋あなた＝私たち」。第一の活動は、クラスで調和を維持するために必要なことについてのディスカッションである。その結果、調和を維持するためには我慢が大切であるとの結論に至った。第二の活動は、自由と調和の象徴であるオレンジ色の服を着て学校にくる「自由服の日 Mufti Day」である。B小学校には制服があるが、ときどき「自由服の日」があり、この日はゴールドコイン（1ドルコインか2ドルコイン）を寄付金として持参して、自由な服を楽しむとともに、学校のファンドレージング（資金集め）に貢献する。第三の活動は、「みんなで分け合う多文化ランチ Multicultural shared lunch」である。自分のバックグラウンドの伝統的な食べものを少し多めに持参して、みんなで分け合い、様々な国の食べものを楽しむという行事である。

B小学校の事例：さまざまな国のお菓子の売店

お菓子の売店は学期に1回、年間4回開催される。1学期はアーリーステージ1、2学期はステージ1、3学期はステージ2、4学期はステージ3の保護者が、自分のバックグラウンドの伝統的なお菓子やケーキを作り、生徒に持たせる⁸⁾。こうして集まった各国のお菓子やケーキをボランティアの保護者や教員が売店で販売し、生徒はモーニングティの時間に好きなお菓子を買うことができる。この行事により270ドルの収益があり、収益金は学校のファンドレージングのために寄付された。

③学区の民族的特性を活かした活動

A小学校の事例：中国の祝祭行事への参加

2004年2月1日(日)、2005年2月13日(日)に、シドニー市主催の「中国の新年パレード」に参加する。10時から12時まで、ジョージストリートをタウンホールからチャイナタウン



写真5 中国の新年パレード

(注) A Public School Newsletter, Term 1 Week 4, Friday 18 February 2005 より転載

ンを、A小学校のプラカードをもって生徒・保護者・教職員がパレードをする。生徒は制服を着用する。2005年は16名の生徒とその家族が参加し、新年を祝う大きな音を立てながら目抜き通りを練り歩いた。さらに、2005年2月18日(金)には、全校生徒と教師が Quarry Green という場所にある Harris Centre (地域のコミュニティセンター) へ遠足にいき、1時30分から2時25分まで、中国の新年を祝うさまざまな催し物を見学した。さらに、生徒が作った「中国の祝祭行事に使う装飾」の作品が、学校の最寄の駅にある公園と、ハーバーにおいて展示された。(写真5 参照)

B 小学校の事例：インドネシアの劇の日 Indonesian Play Day

インドネシア出身の6年生の生徒がインドネシアの伝統的な劇を披露した。ステージ1の生徒に向けて、「自由服の日」の企画のひとつとして、ホールで楽しい劇を演じるとともに、ステージ2と3の生徒にはステージ集会の際に劇を披露した。

④キリスト教の祝祭行事を題材とした活動

A 小学校の事例：イースターの帽子パレード

2004年4月8日(木) 9時15分から10時まで

2005年3月24日(木) 9時15分から10時15分まで

A小学校ではイースターを帽子パレードで祝う。学校の工作の時間に帽子作りをし、さらに家庭でも生徒と保護者が協力して帽子を作る。パレードではそれぞれが作成した帽子を展示する。

B 小学校の事例：イースターの祝祭行事

キリスト教の伝統的なお祭りのひとつであるイースターを以下のふたつの活動を通して祝う。第一の活動は、行商人パレード REDLARS PARADE である。K から2年生までの生徒がトレイにキャンディーやソフトトイ、小さなケーキ、本、使わなくなったおもちゃ

などを詰めて学校に持ち寄り、それをボランティアの保護者が販売する。すべての生徒と保護者、その友達はこの売店から物を買うことができ、ここで得られた収益金は学校のファンデレージングに活かされる。第二の活動は、イースターのくじ引き大会 Easter Raffle drawn である。各家庭の一番小さな子どもたちにチケットを5枚セットで配布し、チケットを1枚1ドルで親や親戚、きょうだいに買い取ってもらい、お金とチケットを学校にもっていくと、チケットをくじ引きの箱に入れてもらえる。最終日にくじ引きがあり、当選者の1位から3位までと、特別賞が当たった子どもたちにイースターのお祝いにふさわしいプレゼントが渡されるという行事である。2004年度はこのくじ引き大会により1500ドルの収益があり、収益金は学校の環境改善や教材の購入などにあてられた。

3. さいごに

2005年8月に実施した調査では、A小学校とB小学校の校長先生が、オーストラリアの伝統と文化を伝える教育活動の構造をどのように把握し、実践しているのかを知るために、インタビューのなかで次のような質問を投げかけてみた。

《A小学校の校長先生へのインタビュー》

Q：オーストラリアの文化を教える教育活動にはどのようなものがありますか？

A：アンザックデーやオーストラリアデーがあります。オーストラリアデーは休暇中にあたるので、少し話しはするものの大きくは扱わないのですが。クリスマスやイースターは大きな行事で、学校では宗教的な面よりも文化的な面を強調するようにしていますが、やはり宗教的な面もしっかりと認識させるようにしています。現在、オーストラリアやイギリスで問題になっているキリスト降誕劇 Nativity play は、宗教的要素が強すぎるので、生徒に強要すべきものではないと考えています。市民性 civic citizenship の育成は、中央レベルで強調されているものです。「人文社会と環境」の教科の一部で扱われ、ステージ3で、市民性や民主主義について学びます。

Q：多文化の尊重に関わる教育活動にはどのようなものがありますか？

A：年中、集会やクラスの活動のなかで他文化のことを勉強しています。前任校はギリシア人が多かったのでギリシア正教の行事が多かったように、地域の民族的背景によって活動内容は異なります。本校は中国人が多いので、中国の新正月、月のお祭りなどをします。2年に1回、大きなプロジェクトをしており、そのプロジェクトのなかでいろいろな文化や宗教にまつわる祭をして、それらの祭の共通点、つまり、ろうそくが使われる、水が大切にされるなどについて考えさせています。その他、「人文社会と環境の科目」や他の教科でも取り上げられます。

《B小学校の校長先生へのインタビュー》

Q：オーストラリアの文化を教える教育活動にはどのようなものがありますか？

A：多文化学校の本校では、オーストラリアの共通価値について保護者からもよく質問を受けます。まず、「人文科学と環境」の教科のなかでは、入植者の歴史、キャプテンクック、ファーストフリート、ゴールドラッシュなど、オーストラリアの重要な歴史

について勉強しています。詩の週間では、オーストラリアの詩を勉強しました。オーストラリアの文化は「公平さ」「平等の機会を与える」「友情」といえるでしょう。スポーツやディスコやBBQを通してこれらの価値を伝達しています。アンザックデー、謝罪の日に関わる行事もオーストラリアを理解するうえで重要な活動です。オーストラリアの共通価値や文化は、これらの活動を通して副次的に生徒達に伝達されるものです。オーストラリアの服装を着て、オーストラリアの振舞を強制することはありません。

Q：多文化の尊重に関わる教育活動にはどのようなものがありますか？

A：90%以上の子どもが英語を母国語としない子どもたちが集まっているので、「違いを尊重し理解しよう」を学校目標のひとつに掲げています。明示的ではなく、毎日の外国語のクラスによって自然に他文化を理解して、寛大さを身につけることに努めています。LOTE 週間や調和の日、アボリジニとトレス島嶼民週間なども大切な行事です。スクールディスコではブッシュダンスをするなど、教育活動のなかに自然に組み入れるようにしています。

両小学校における実践と校長先生のインタビューから、オーストラリアの伝統と文化を伝える教育活動の重要な特徴が見えてくる。

第一に、新しい国家であるオーストラリアでは、オーストラリアに関して国民が共通してもつべき歴史や先住民に関する知識を通して、多様性のなかの共通性、いわゆる共同幻想⁹⁾を作り上げようとしている。特に、アンザックデーのセレモニーに見られるように、第二次世界大戦の戦勝国であるオーストラリアは、人々の戦争の記憶を利用して、オーストラリア人であることの誇りや一体感を演出しようとしている。

第二に、オーストラリアの文化と伝統を伝える教育活動のうち、教科外活動として提供される活動は、各学校の裁量にゆだねられているため、各学校の民族的構成や地域特性が現れるものとなっている。それらはまず、第二言語の開講状況に現れ、さらに、学校で実施される祝祭行事や学校行事の数々に現れる。

第三に、A小学校の校長が言及しているように、イギリス系移民が多数派を占めていた時代には主流派であったキリスト教の祝祭行事や習慣を、無批判に学校に取り入れることはできなくなっていることである。A小学校やB小学校では、売店やパレードをしてイースターを祝い、あるいは遠足を実施してクリスマスを祝うなどの活動を取り入れているが、移民して時間の浅い人々の多い地域、特にイスラム教徒の多い地域では、保護者の反対により、キリスト教の祝祭行事を実施できなくなっている地域もある。また、すべての子どもたちのバックグラウンドを平等に扱うことは不可能であるため、ポリティカルコレクトネスを追究するあまり、いかなる民族的・宗教的祝祭行事をも学校で実施できなくなるという事態に直面している学校もある。

本論文で紹介した事例からは、オーストラリアの学校が、「オーストラリア人であるという共通性の模索と創造」と「民族的・宗教的・言語的多様性の尊重」を真摯に両立させようとする姿勢が垣間見られる。今後も、多民族国家の代表格であるオーストラリアが、いかに文化と伝統を創造し、継承していくのかを注意深く見守っていきたい。

《謝辞》

調査にご協力いただいたA小学校とB小学校の校長先生ならびに児童・生徒のみなさんに、この場を借りて心より御礼を申し上げます。また本研究は、2005年度椋山女学園大学学園研究費助成金A（研究代表者：村上心）の受給研究の一環として実施された。本研究の推進のために必要な資金を与えてくれた本学園に対しても、深く謝意を表したい。

注

- 1) 本論文で紹介するデータは、村上心（椋山女学園大学生生活科学部助教授）が研究代表者を務める「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究会」において共同で収集したものである。研究会のメンバーは、村上心、山田真紀、川野紀江（椋山女学園大学生生活科学部助手）の3名である。
- 2) ふたつの公立小学校の学校規模、歴史、教職員の種類、学区の特性については、山田真紀「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究Ⅱ——オーストラリアNSW州の学校教育と調査対象校の概要について——」『椋山女学園大学研究論集』第36号（自然科学篇）、77-91頁において詳述しているため、そちらもあわせて参照いただきたい。
- 3) オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州の教科の構造と、教科への配当時間については、以下の論文を参照のこと。山田真紀「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究Ⅲ——オーストラリアNSW州の小学校の教科の内容と構造に注目して——」『人間関係学研究』第3号、2005年、79-96頁。
- 4) ESLは持ち出し授業形式で行われる。ESLには3つのレベルがある。レベル1はまったく英語を話すことのできない生徒を対象とし、マンツーマンで対応する。レベル2はオーストラリア在住歴が3年以下の生徒を対象とし、小グループで英語を教える。レベル3は、英語を第一言語としないが、3年から5年間オーストラリアに住んでおり、基本的な英語を覚えている生徒を対象とし、英語能力の不足部分を補う。ESLの対象となる児童・生徒が少ない学校では、非常勤の講師が必要に応じて来校するが、移民の多い地域の学校であるA小学校には1名、B小学校には5名の常勤講師がいる（人数は2003年当時）。
- 5) 「和解週間」National Reconciliation Week に関しては、以下のHPを参照した。
<http://www.cultureandrecreation.gov.au/articles/reconciliation/>
- 6) 生徒リーダーとは、A小学校の6年生のうち、選挙で選ばれた8名をさし、朝会の司会をし、朝会の議事進行に関する毎週のレポートを作成し、また国会議事堂に子どもが派遣される際の代表になり、あるいはゲストが来校した折には、校内の案内役を務める。山田真紀「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究Ⅴ——オーストラリアNSW州の小学校の教科外活動の内容と構造に注目して——」『椋山女学園大学総合クリエイティブセンター研究論集「創」』第7号、2005年、41-58頁。
- 7) ドリーミングストーリーとはアボリジニの天地創造神話であり、これは天地創造とアボリジニ民族の誕生についての逸話であるとともに、アボリジニの生き方や生活習慣を代々受け継いでいくために利用されるものである。
- 8) ステージとは学習指導要領に定められた学年段階を表す類型で、アーリーステージ1がK、ステージ1が1年と2年、ステージ2が3年と4年、ステージ3が5年と6年を示している。
- 9) ベネディクト・アンダーソン（白石さや・白石隆訳）『増補 想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行』NTT出版、1997年。